

コロナ禍で増加！？ 帯状ほう疹にご注意を

帯状ほう疹は、子どものころにかかる「水ぼうそう」が原因で起こります。このウイルスは、水ぼうそうが治ったあとも、ずっと神経の根元(神経節)に潜んでいます。これが加齢、疲労、ストレスなどにより免疫力が低下すると、再び活性化し、帯状ほう疹を発症するのです。50歳以上になると急に増加し、生涯において約3人に1人が発症するといわれています。発症者数は年々増加していますが、コロナ禍になりさらに増えています。ストレスや運動不足などによる免疫低下が関係しているようです。

症状は、まず体の一部にピリピリする痛みを感じ、まもなく毛虫に刺されたような赤い発疹が出てきます。徐々に融合して水ぶくれになり、簡単に破れて汁が出ます。かさぶたになって治癒したあとも長い間、激痛に悩まされることがあります。「帯状ほう疹後神経痛」といいます。また頭(特に額から目の辺り)に帯状ほう疹ができると、失明したり、脳梗塞になったりすることもあります。重篤な後遺症をおこさないために、抗ウイルス薬での治療をできるだけ早く開始する必要があります。ためらわずに皮膚科を受診しましょう。

50歳以上であれば、ワクチン接種により帯状ほう疹を予防できます。ワクチンには2種類あり、ひとつは毒性を弱めたウイルスを用いた「生ワクチン」です。もうひとつはウイルス表面タンパクの一部を抗原とした「組換えサブユニットワクチン」で、2020年に新規販売されました。こちらの方が予防効果ははるかに高く、また免疫抑制剤や抗がん剤で治療している人なども接種できますが、2回接種しなければならず、値段も高額です。

特に高齢者の方は、これを機にワクチン接種について、ぜひとも積極的に考えてみてください。かかりつけ医にお気軽にご相談ください。